

さて、若干の説明を加えると、a-①は非常に稀な事例となる。7世紀後半の29号住居跡は、白色系粘土で作られた天井部と袖部がかなり残存しており、支脚に転用された2つの小型土器（一つは軽石加工品を内包）の上には、それぞれ土師器甕が据えられたままであった。ただ、これらの土器と火床面の位置関係からすると、焚口付近の天井部や袖部の損壊が多少あったと考えられる。しかし、それが人為的なものか否かは区別できない。他方、8世紀後半～9世紀初頭頃とみられる2号住居跡の例は、両袖が天井部とともに内傾していたものの、天井部・袖部・火床面の位置関係を把握しやすい好例である。特に注目すべきは、住居焼失の際、表面の白色系粘土が被熱・固化したため、遺存状態が非常に良く、天井部から袖部にかけての断面形状が直角気味だったと解る点である。土器や支脚等は出土していないが、カマド上面に炭化材が覆い被さっていた状況からすると、住居焼失前にこれらを除去していた可能性がある。上記2例、とりわけ29号住居跡は、本県で最も良好なカマドの遺存事例に入るとみて良いが、僅か2例と数が少ないため、これらが本遺跡における標準的な姿だったのかどうか判断し難い迷う部分もある。

こうした意味において、本遺跡における住居廃棄後のカマドとして最も一般的な姿は、次のa-②だといえる。主として天井部が欠損、場合によっては支脚等が残っている事例であり、適宜、b-①～⑤と連動する。1～5群まで普遍的に存在するタイプであり、カマド内の覆土は焼土や炭化物粒の混ざった黒色土が主体となる。稀に白色粘土を一定量含むものもあり、よって天井部が崩落したようなものもあるが、大抵の場合、廃絶時に天井部が失われていたように思われる。

これに対し、a-③のように天井部や袖部を大きく破壊され、土器や支脚も残っていない事例というものは意外と少ない。但し、5群にはやや多く、意図的な破壊を受けたせいか、覆土中に白色粘土と断片化した土器が数多く含まれている場合もある。今のところ、9世紀後半頃に特徴的な現象といえば、この時期、カマドを廃棄する意識に何らかの変化が生じたのであろうか。

なお、カマド内から出土する土器は、1・2群の残存率が高く、5群は細片化していることが多い。他にも、カマド周辺の床面上から完形の土器が出土することもあるが、1個体程度の場合もあれば、複数の場合もある。周辺から多数の土器が出土した24号住居跡では、カマド右脇に球胴甕の上半部が置台として据えられていた。

ところで、カマドの破壊=住居の廃絶となるか否かという非常に難しい問題があるが、本遺跡では幾つかの住居跡において、カマドの廃絶から住居焼失までの期間が比較的短いと推定される事例があった。それは、住居焼失に伴う炭化材層や炭化材がカマド上面を直に覆っていたものであり、b-④に挙げた住居跡の全てが当てはまる。とりわけ、27号住居跡（2群）では、住居焼失以前にカマドの破壊と意図的な土器の損壊が行われており、儀礼的要素のある環状錫製品と土玉が床面上から発見された。これらが一体化した状態で居住機能が停止されたのか、それとも各々が個別に行われたのか定かではないが、遺物や覆土の状況などからすると、カマドの破壊後、比較的短期間のうちに住居が廃棄された可能性が高い。

以上、本遺跡のカマドの多くは、天井部を壊すことがカマド廃絶に必要な最低限の条件だったとみなされる。この傾向は1・2群ほど強く表れているが、5群になるとやや崩れ、大きな破壊を伴うものが一定量現われる。しかしながら、袖部・支脚・土器芯材までを除去・破壊した例は少なく、天井を壊し、カマドに光を入れることで十分だったようと思われる。カマドの破壊後、短期間のうちに焼

失した住居が認められるのも本遺跡の特徴であろう。

3. 住居内の各施設および特徴

Pitの形状

基本的には円形に近い。しかし、中には明らかに方形のものが存在しており、時期不明の15号住居跡と2群の37号および38号住居跡において確認されている。いずれも主柱穴である。

主柱の据え直し

主なものは3例確認されている（ふくべ（3）遺跡27住、ふくべ（4）遺跡1・4住）。ふくべ（4）遺跡の2例は、据え直しの際、当初あった位置よりも内側へ柱を入れたものと考えられる。なお、ふくべ（3）遺跡の28・29住でも主柱を据え直した可能性はあるが、必ずしも明瞭ではないようと思える。

間仕切り

2例確認された。ふくべ（4）遺跡4号住居跡（2群）のものは、壁際から住居中程へ延びる。長さ1.4m、幅15cm、深さ6cmほどの溝である。深さ12cmほどの壁溝と繋がっているが、これよりも浅い特徴がある。他方、ふくべ（3）遺跡28号住居跡（5群）のものは、いわゆる間仕切りといえるかどうか定かではないが、深さのある柱穴同士を繋ぐ溝である（一方は主柱穴）。こちらは、長さ2.3m、幅15cm、深さ15cmほどを測る。

大型の土坑

便宜的に深さ50cm以上のものを抽出すると、1群に2棟（17・20住）、2群に2棟（27・38住）（註22）、3群に1棟（4住）、5群に1棟（16住）、計6棟確認される。母数が少なく不明瞭ながら、1・2群段階は住居中央付近、3群以降は壁際に設けられる傾向があり、16住と27住は断面形が袋状となる。いずれも覆土中に褐色土（Ⅶ～Ⅷ層）を多く含んでおり、人為的に一気に埋められた可能性が高い。こうした覆土の特徴からすると、一見、床面との区別がつきにくい場合もあるが、詳しく観察すると、色調が異なっていたり、軟質だったり、床面が少し凹むなどしていたりするので、一応の判断は付く（註23）。ともかく、住居焼失の痕跡を示す遺構が多く、その場合、住居焼失以前に埋め戻されていたことは確かである。なお、これまでのところ、特徴的な遺物の在り方は認められていない。

内面に白色系粘土が貼られた土坑

1群に1基（17住）、2群に4基（ふくべ（3）遺跡37・38・39住、ふくべ（4）遺跡4住）、1～2群に3基（全て32b住）、6棟の住居において計8基確認された。今のところ、1・2群に集中する。土坑が設けられる位置は各住居跡で異なっており、統一されているようにはみえない。無煙道式のカマドの手前に存在する例（39住）もある。また、住居中央に深い土坑として存在する例（17住）では、壁面の一部が崩れ易いⅩ層（南部浮石層）となっているため、機能性も考慮し、壁落防止の意

味で白色系粘土を貼付けたようにもみえる。なお、本土坑でも特徴的な遺物の在り方は認められていない。

床面の被熱範囲

2群に4棟(7・13・34・39住)、3群に1棟(5住)、5群に3棟(14・28・31住)、計8棟認められる。床面中央付近に明瞭に存在する場合とそれ以外の場合とに傾向が分かれる。

特に注目される前者は、被熱の度合いが強く、恒常的な使用が想定される。恐らく、炉のように機能していたと思われるが、興味深いことに2群の全てが該当する。これらの住居跡は、カマドの煙道部構造が半地下式や無煙道式となるものが2例含まれており(7・39住)、他の2例にもその疑いがある。カマドの煙道部構造でも触れたとおり、いずれも3~4m台の浅く主柱穴が無い住居跡である。

これに対し、後者は前者よりも被熱の度合いが弱く、位置も統一されていない感がある。形成の理由は定かではないが、住居焼失に伴う被熱なども想定される(註24)。

出入口

確実なものが1例、やや確実性に欠けるものが1例確認される。前者は、小型の35号住居跡(5群)のカマドと反対側の壁際に設けられ、丁度、斜面下方へと出していく形となる。スロープ状を呈し、表面は硬化している。他方、後者は大型の5号住居跡(3群)のカマド左脇に位置する。前者のような硬化が特にみられないため確定には至らないが、仮に出入口とすれば斜面上方へ出していくことになる。なお、両者の時代と形状は全く異なっている。

焼失住居

前回の調査結果を含めると、これまでに同定した炭化材76点を数える。内訳は、コナラ節62、クルミ属1、オニグルミ1、イボタノキ属2、キハダ属1、トネリコ属1、ヤナギ属3、ニガキ1、ケヤキ1、草本3である(註25)。多くは住居の構造材だったと思われるが、これが妥当ならば、コナラ節が選択的に用いていたということになる。ちなみに、コナラは時代とは無関係に本県の太平洋側で多く用いられる傾向がある。その他の樹種も構造材や家財などに利用されていたのであろう。草本も屋根材のカヤなどに使われていたと思われる。以下、各群の内容をまとめておくが、1・3群で焼失の割合が高く、5群には明確なものがほとんど見当たらない傾向がある。

1群 7棟が該当する。焼失が確実な資料が5棟(20・22・26・32b・33住)(註26)、やや炭化材の量が少なく疑わしいものが2棟ある(17・29住)。いずれもふくべ(3) 遺跡の住居跡である。これらのうち、17号を除く6棟で炭化材を同定したところ、コナラ節43、クルミ属1、イボタノキ属2、キハダ属1、草本1、トネリコ属1という結果を得た。17住と20住は3m台と比較的小型ではあるが、他は主柱を備えた一辺4m以上の家屋である。本群に属す住居跡は、可能性のあるものも含め11棟確認されているが、大変興味深いことに、カマドの煙道部構造が地下式のもの(=上記の7棟)が全て焼失している可能性が高いのに対し、半地下式のものには一切焼失が認められない。

2群 4棟が該当する(ふくべ(3) 24・27住、ふくべ(4) 1・4住)。これらの炭化材を同定したところ、コナラ節16、オニグルミ1、ニガキ1という結果を得た。いずれも主柱を備えた一辺4

m以上の中屋であるが、本段階に属す住居跡13棟という数からすれば、焼失の割合は低いといえる。

3群 この段階に属す3棟全てが該当する（2・4・5住）。主柱の無い小型の2号および4号住居跡で4点の炭化材を同定したところ、コナラ節1、ヤナギ属3という判定を得た。耐久性の低いヤナギが使われた理由は定かではないが、仮に構築材だったとすれば、これらの建物の規模が小さかったからであろうか。

4群 焼失が明瞭な2棟（ふくべ（3）遺跡1住、ふくべ（4）遺跡3住）、炭化材の僅かな1棟（ふくべ（3）遺跡3住）が該当する。良好な炭化材が得られなかったため、ふくべ（4）遺跡3号住居跡の1点のみを同定したところ、ケヤキと判定された。構造材と捉えているが、数的には断定できる状況ではない。

5群 明確な形で焼失した住居跡が確認されていない。床面上から炭化材が若干出土したのが3棟（14・16・42住）、焼土が出土したのが1棟（30住）である。42号住居跡の炭化物4点を同定した結果、コナラ節2、草本2という結果だった。本群に属す住居跡は17棟あるが、群全体に占める焼失家屋の割合は低く、焼失の有無が曖昧な遺構も散見される。いずれにしても、炭化材が大量に検出されるることは無く、発見されたとしても材の残存率が低い特徴がある。

4. 住居埋没過程における人為堆積層の形成

6棟に確認される（10・17・32b・34・39・47住）。いずれも床面よりもやや上位において、黄褐色土を主体とする明瞭な人為堆積層が形成される。基本的に1・2群の住居跡のみにみられる現象であり、カマドの煙道部構造が半地下式、あるいは無煙道式となる住居跡の割合が高い（10・39・47住、34住は可能性のみ）。なお、次に述べる人為的な遺物の投入を顕著に伴っているものもある（32b・47住）。

5. 住居埋没過程における人為的な遺物の投入

明らかなものは4棟確認された（7・8・32b・47住）。床面よりもやや上位の層で確認される場合が多く、2群の遺物が集中的に出土する傾向がある。32b号住居跡では、住居の焼失後に人為堆積層の形成と遺物の投入が行われた模様だが、他の遺構では遺物の投入のみが行われている。

なお、こうした遺構内から遺物が出土する際、出土位置が分散している上、著しく断片化している個体が多い。それにも関わらず、形が復元できるものが含まれているため、意図的な破壊ないし断片化があったようにすら思える。なお、断片化の著しい遺物は、円形周溝からも出土する。何か共通するような意識があったのだろうか。

6. 掘立柱建物跡

十和田a火山灰降下以前のものとして確実なのが1棟（8号）、その可能性のあるものが5棟（1・2・3・4・9号）該当する。個々の説明は下記に譲るとして、先に要点を3つ挙げておく。第一に、各建物の南北軸が竪穴住居跡の主軸方向と概ね一致するということ。第二に、それぞれの可能性を最大限考慮しつつ年代を示すならば、1～4号が4～5群の中で重複関係にあり、8号が確実に十和田a火山灰降下以前、9号が5群に属すということ。この場合、掘立柱建物跡の主体は9世紀

中葉前後となる。第三に、1~4号が1ヶ所に集中するということである。これら4棟は目の前に建物跡の類がほとんど存在しない場所に設けられており、これだけ掘立柱建物跡が集中する地点は調査範囲内では他に見当たらない。ちなみに、この場所は台地の最南端にあたり、奥入瀬川へと流れ込む沢を眼下に見下ろすことが可能である。奥入瀬川下流域一帯の見晴らしも特に良い。

1号 1×2間の建物。規模約1.9×2.2m。南北の軸方向は、N-47°-W。こうした特徴は、4号に類似する。2・3号に近接し、重複関係にあったと思われる。調査区内における位置に加え、年代的にも2・3号と関連性があったと仮定すれば、4号同様、4群や5群あたりに属す可能性がでてくることだろう。

2号 2×2間の総柱建物。規模約2.8×3.2m。南北の軸方向は、N-9°-W。3号とは、同一地点における建て替えも想定されるが、3号に伴う可能性のある2号土坑とは重複関係にある。

3号 1×1間の建物。規模約2.5×2.7m。南北の軸方向は、N-13°-W。仮に2号土坑（4群か5群の可能性のあり）を内包した場合、4群か5群に属す可能性が生まれてくる。2号とは同一地点における建て替えだったとも考えられる。

4号 1×2間の建物。規模約1.6×2.1m。南北の軸方向は、N-45°-W。2・3号に近接し、重複関係にあったと思われる。特徴の類似する1号同様、2・3号と関連性があったと仮定すれば、4群や5群あたりに属す可能性が浮上する。

8号 2×2間の総柱建物。規模約3.5×3.6m。南北の軸方向は、N-29°-W。斜面上方の柱列に溝状の掘り込みを伴う。具体的時期は不詳だが、十和田a降灰以前に構築された2号円形周溝に先行する。

9号 1×1間の建物。規模約3.1×3.2m。南北の軸方向は、N-29°-W。内部に存在する5号土坑（5群）を伴うならば、5群に属すこととなる。

7. 円形周溝

2006年の調査で初めて確認された。ふくべ(3)遺跡で2基（1・2号）、ふくべ(4)遺跡で1基（1号）である（図20）。3基とも主体部が見当たらず、墳丘のあった証拠・形跡も認め難い。また、いずれも十和田aないし白頭山火山灰降下前に構築されていたと考えられるものの（註27）、具体的時期が定かではない。

ただ、いずれも7世紀後半～8世紀初頭頃とみられる土器片が出土しており（ふくべ(3)遺跡2号は、土器片1点のみの出土）、特にふくべ(3)遺跡1号とふくべ(4)遺跡1号には、2~3cm程度にまで断片化した土器片が相当な割合で含まれていた。こうした土器片が集中する遺構は、本遺跡ではあまり例が無く、しかも遺跡・地点が離れている円形周溝に共通するとすると、上記の現象が何か意図的な行為だったように思えてくる。なお、この中には僅かながら9世紀代の土器片も混ざっており、これに火山灰の状況も考慮すると、今回発見された3基の年代は、7世紀末～8世紀初頭頃、もしくは9世紀後半頃だったと推測される（註28）。

この他、大変興味深いことに、ふくべ(3)遺跡の2基は大小並んでおり、しかも大きい方が小さい方のほぼ倍の大きさとなっている。これも何らかの意味があって、大小同時に築かれていたとみなされる。

以上、今回の調査では、あまり具体的なことは解明できなかったものの、大小隣接している事例に加え、7世紀後半～8世紀前半頃の土器が主体になること、土器細片化行為があった可能性などが確かめられた。

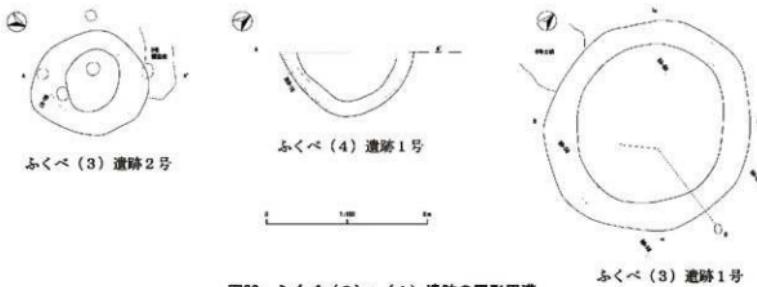


図20 ふくべ (3)・(4) 遺跡の円形周溝

8. 土坑

これまでのところ、この時代が確実あるいは可能性の高いものとして、1・2・3・5・7号が挙げられる。円形（1・5・7号）と方形（2・3号）の2種があり、確認面からの深さは概ね50cm以下である。年代が推定できるものは主に5群の特徴を示しており、1号と5号の覆土上部には十和田a火山灰が層状に堆積し、2号からは4～5群の土器片が出土する。底面が被熱している5号からは、5群の上器とともに焼上や炭化種実（イネ44・イネ？2）が検出された。また、時期不明ながら、7号からは炭化物とともに鉄錫の付着した金床石らしき台石が出土しており、3号も5群の19号住居跡以前に構築されている。これらの具体的な時期はあくまで不明だが、一般的に土坑が形成される平安期、つまり4群か5群あたりだろうか。

9. 道路状遺構

確実なものは、ふくべ (4) 遺跡で発見されている（1号）。長さ35m以上、幅1～1.5m、深さ20～30cmほどの溝として確認され、幾つか枝分かれしている。底面は硬い。Ⅲ層中より掘り込まれていることから、Ⅱ層形成以前、つまり白頭山火山灰降下以前に属する可能性が高い。底面付近からまとまって2群の土器が出土している箇所があることに加え、付近には2群に属す4号住居跡が存在するため、今のところ7世紀末～8世紀初頭頃に機能していた可能性が高いと考えられる。将来、周辺から発見される遺構との関連性により、更に詳細が明らかになっていくことだろう。

10. 燃土遺構

確実性の高いものが1基（1号）、可能性のあるものが3基（2・3・4号）確認されており、目下、ふくべ (3) 遺跡のみに存在している。1号は5号住居跡の東隣に位置し、金床石らしき台石と

ともに発見された。V～VI層で確認されたため、仮に古代に形成されたとすれば、土坑などの掘り込みの底面上にあったようにも思われる。この他、2号は5号掘立柱建物跡内部のIV～V層、3号はII層下部～III層上部、4号は第1号円形周溝内部のIII層上部で確認している。これらについても、確認・形成面および周辺遺構との位置関係から飛鳥～平安時代の可能性があるものの、実際の時期は不明である。

11. 十和田a・白頭山降下火山灰の堆積状況

本遺跡の場合、基本的に黒色土を主体とする自然堆積によって住居は埋没してゆく。そして、5群を最後に集落機能が停止し、少し間をおいてから十和田aないし白頭山が降下し、各々層状に堆積する。

ところで、これらの火山灰は、1群のような古い段階の遺構ほど認めにくく、5群のような新しい段階ほど認め易い。どちらかというと十和田aが一般的であるが、4群以降、すなわち9世紀前半以降の遺構には白頭山も散見される。以下、各群における火山灰の様相をまとめておく。

1群 本群に属す住居跡は、少なくとも9棟あるが、全てにおいて確認できない。

2群 本群に属す住居跡13棟中、7棟に認められる（ふくべ（3）遺跡6・24・37・38住、ふくべ（4）1・2・4住）。十和田aないし白頭山を含む円形周溝1基（ふくべ（4）遺跡1号）も本群に含まれる可能性がある。全ての住居跡に十和田aが堆積しているものの、このうち白頭山まで含んでいたのは3例である（ふくべ（3）遺跡24住、ふくべ（4）遺跡2・4住）。本群の火山灰は、比較的、ふくべ（4）遺跡で検出される割合が高く、加えて規模や深さのある住居の覆土上部に堆積する傾向が読み取れるが、例外的に床面中央付近の覆土下層で確認されたものもある（ふくべ（4）遺跡2住）。なお、カマド煙道部が半地下水式および無煙道式となる住居では、住居自体が浅い上、人為的な土壤堆積と遺物投入が行われている割合が高いこともあり、火山灰は見当たらない。

3群 本群に属す住居跡は3棟あるが、全てにおいて未確認である。小規模あるいは浅い住居跡が多いことと関係するのだろうか。表土除去から遺構検出までの間に失われた可能性も否めない。

4群 本群に属す住居跡4棟全てに認められる（ふくべ（3）遺跡1・3・9住、ふくべ（4）遺跡3住）。基本的に十和田aと白頭山の両方を含んでおり、十和田aのみというのは1棟だけである（ふくべ（3）1住）。

5群 本群に属す住居跡18棟中14棟（ふくべ（3）遺跡12・14・19・21・28・30・31・32a・35・41・42・43・44・45号）、土坑2基（ふくべ（3）遺跡1・5号）に認められる。これら全てに十和田aが堆積しており、このうち白頭山も堆積するのは住居跡7棟である（14・19・28・30・31・43・45住）。ちなみに、本群の住居跡で火山灰が確認されていないのは、16・23・25号の3棟である。なお、本群に属す可能性のある円形周溝1基（ふくべ（4）遺跡1号）にも十和田aもしくは白頭山のどちらかが含まれている。

12. 各群における遺構配置（図21～23）

ここでは、時期特定あるいは時期推定可能な遺構を中心に、各群の遺構配置を考えることとする。その際、時期推定可能な住居のうち、遺物が乏しい32a住と46住は降下火山灰の堆積状況やカマドの構造から便宜上5群とし、2群の遺物が人為的に集中投入された32b住と47住は便宜上1群とする。なお、15住と48住については年代が推定できないため除外、40住に関しても重複関係から5群以前で

あることは確かだが、年代推定の根拠が乏しいため除外する。また、年代の推測を重ねた掘立柱建物のうち、1・2・3・4・9号を便宜上5群とした。

1群

確実性の高い住居跡9棟（8・10・17・18・20・22・26・29・33住）、可能性のある住居跡2棟（32b・47住）が該当する。カマドの煙道部構造が地下式か半地下式か異なることにより、住居の特徴、埋没過程、焼失・重複の有無が分かれる点が興味深い。

住居配置 ふくべ（3）遺跡では、調査区の北西寄りに展開するが、ふくべ（4）遺跡では今のところ確認されていない。住居間の距離は7～20m前後、平均10m程度である。17住と18住が接近するが、前回の報告で述べたとおり、18住がこの段階の中でも最も古い可能性があることと関係があるのかもしれない。

住居の特徴 一辺が3～5m台のもので構成される。大小の差はそれほど明確ではないが、4mを超えるあたりから主柱の有無が分かれる。地下式のカマドを備えた住居は、住居自体の掘り込みが深く主柱を伴うのに対し、半地下式のカマドを備えた3棟（8・10・47住）は、住居自体の掘り込みが浅く主柱を伴わない。

住居の焼失・埋没 地下式のカマドを備えた住居は基本的に焼失しており、構築材としてコナラが多用される。これに対し、半地下式のカマドを備えた住居は焼失が認められず、構造材も不明である。

なお、後者のような浅く規模の小さい住居跡には、埋没過程の初期に人為的な土壤や土器の投入される傾向にあり、5群の展開する9世紀半ば頃に埋没していた可能性が高い。いずれにせよ、本群の住居跡で平安時代の降下火山灰が堆積する例が見当たらないため、10世紀前半には全ての遺構がほぼ埋没していたと考えられる。

主な出土遺物 土師器壺・甕、土製紡錘車、土製支脚、軽石加工品、砥石、編物石らしき被熱碟などのほか、カマド覆土より栽培植物のイネ・アワ・ササゲ属が炭化種実となって発見されている。しかし、須恵器や鉄製品は、今のところ見当たらない。

2群

確実性の高い住居跡13棟が該当する（ふくべ（3）遺跡6・7・11・13・24・27・34・37・38・39住、ふくべ（4）遺跡1・2・4住）。図示していないが、円形周溝3基も本群もしくは5群に属す可能性がある。

住居配置 ふくべ（3）遺跡は調査区の北西寄り、ふくべ（4）遺跡では小規模な谷や沢を見下ろす南斜面に居を構えている。ふくべ（3）遺跡の場合、住居間の距離は1.5～28m前後、平均10m程度である。概ね1群の住居に隣接しているが、1群と2群の住居跡が重複しない点を考慮すると、2群の住居は1群の住居跡を避けながら構築された可能性が高い。

住居の特徴 多くは一辺4m前後の規模であるが、最小で3m前後（13・39住）、最大で7.6m（24住）というものもあり、規模や機能の分化も想定される。ふくべ（4）遺跡の2住のみ、3.9×6.3mの長方形を呈し、床面積からすれば1辺5m弱のクラスに相当する。4mを超えるあたりから主柱の有無が明確になるが、1群同様、半地下式や無煙道式のカマドを備えた住居に主柱穴は見当たらない。

住居の焼失・埋没 焼失は4棟にしか認められないが、主柱を備える住居の構築材としてコナラ節が多用されていたことが解る。また、埋没過程における人為的な遺物の投入は、1群同様、半地下式のカマドを備えた7号住居跡に認められる。この他、平安時代の降下火山灰が約半数の住居にみられることから、これらは10世紀前半頃まで団地とだったと考えられる。これに対し、火山灰が確認されなかった遺構は、ほぼ埋没していたと思われる。

主な出土遺物 土師器坏・甕・土製紡錘車・土製支脚・軽石加工品・砥石・台石・敲磨器・鉄斧(註29)のほか、土製玉類・ガラス玉・環状錫製品(註30)・鉄製轡など、近隣の阿光坊古墳群に通じる特殊遺物も発見された。カマド覆土からは、いずれも栽培植物のイネ・アワ・コムギ・ムギ類・ササゲ属が炭化種実となって検出されている。なお、球胴甕の中には上半分をカマド脇の床面上に設置し、置台として利用したものもみられる。周辺遺跡における置台の事例は前回の報告を参照のこと。

3群

ふくべ(3)遺跡の3棟が該当する(ふくべ(3)2・4・5住)。いずれも焼失しており、土師器坏の形状からすると8世紀末~9世紀初頭頃に該当する可能性もある。

住居の配置 調査区南東部、つまり台地の南端に居を構えており、1・2群の段階に形成された住居の団地を避けるかのように配置されている。住居間の距離は、8~10m程度である。

住居の特徴 大型で主柱穴を備える5号住居跡のほか、一辺が3m台前半で主柱穴が無い2号そして4号住居跡という組み合わせになる。カマドの煙道部構造は、1・2群と5群の中間的な特徴を備えており、遺物の年代とも整合性があるように思われる。

住居の焼失・埋没 3棟とも焼失している。良好な炭化材が無く4点しか同定していないが、コナラ属1、ヤナギ属3という判定を得た。建物の規模が小さいため、耐久性の低いヤナギを構築材に利用したのであろうか。なお、2群より後出するにも関わらず、平安時代の降下火山灰は見当たらない。

主な出土遺物 断片的ではあるが、土師器坏・甕・須恵器坏・土製紡錘車・鉄鎌・鉄鎌などが発見されている。非ロクロ坏の底部が平底化しているため、いわゆる奈良時代の土器の中でも最晩年、つまり8世紀末~9世紀初頭頃に該当するかもしれない。ロクロで作られた移入品の須恵器(底部回転ヘラ切り)もこの頃の特徴を示すとみられる。仮にこの年代に従った場合、本群は隣接する4群の1号住居跡に近い時期であることから、見方によっては4群の一部と併存していた可能性も浮上する。ただ、須恵器坏の形状に着目すると、本群の住居跡の方が古い要素を備えているように思われる。

4群

4棟が該当する(ふくべ(3)遺跡1・3・9住、ふくべ(4)遺跡3住)。3群で触れたとおり、ふくべ(3)遺跡1号住居跡の年代は、考え方により3群と近接する。これに対し、他の3棟は5群に近い特徴を備えている(註31)。このため、本群には今のところ一定の幅を持たせておき、資料が蓄積した段階で改めて検討した方が良いのかも知れない。

住居の配置 ふくべ(3)遺跡では、3群同様、調査区南東部の台地南端に居を構えているため、1・2群段階に形成された住居の団地を避けているかのようにもみえる。住居間の距離は、8~28m程度である。他方、ふくべ(4)遺跡では、2群同様、小規模な谷や沢を見下ろす南斜面上となる。

住居の特徴 主柱を有するのは、一辺5m前後の1号住居跡のみである。他の3棟は、3m台で主柱が無い。カマド煙道部の断面形状は、1号が3群、他の3棟が5群に類似する。

住居の焼失・埋没 4棟中、少なくとも2棟が焼失しているが、住居の構築材について明言できる状況はない。ふくべ(4)遺跡3号住居跡でケヤキが1点確認された程度である。なお、遺構の覆土には、基本的に十和田a・白頭山火山灰の両方を含む。

主な出土遺物 土師器壺・甕・瓶、須恵器長頸壺・横瓶、土製紡錘車、鉄鎌などがあり、ロクロ土師器が主流化する。9号住居跡の覆土中から鉄製の銅帶金具が出土しているが、出土位置からすると、本群に伴うかどうか微妙なところである。

5群

最終段階。住居跡18棟(12・14・16・19・21・23・25・28・30・31・32a・35・41・42・43・44・45・46号)、掘立柱建物跡5(1・2・3・4・9号)、土坑3(1・2・5号)が該当する。図示していないが、円形周溝3基も本群もしくは2群に属す可能性がある。確実な遺構は、目下、ふくべ(3)遺跡にしか存在しないが、ふくべ(4)遺跡の遺構外からも本段階とみられる遺物を幾つか得ているので、将来、遺構の発見が期待される。

住居の配置 1・2群同様、調査区の北西寄りに居を構えている。かつて1・2群の住居があった場所に再び戻るような格好となった理由は不明だが、恐らく3・4群の住居跡が残した凹地を避ける狙いがあったと同時に、1・2群の住居が相当埋没し、新たな住居構築が可能となりつつあったことも関係していたであろう。この点は、降下火山灰の堆積状況から判断される。ただ、それでも前段階の住居があったところは意識的に避け、密集する過去の住居跡の凹地を縫うようにしながら本群の住居は築かれていたと思われる。この点は、より埋没の進んだ1・2群の浅い住居跡のみが5群に破壊されるという遺構の重複関係にも表れていよう。なお、住居間の距離は6~10m前後、平均7m程度である。

住居の特徴 積穴住居跡の主軸方向、つまりカマドの設置位置は、1・2群に比べると真北に近くになり、一辺3~4m台の住居を軸に、2mまたは5m前後のもので構成される。このうち主柱がみられるのは、5m前後でカマドを2基備えた14住と28住だけである。カマドは、煙道部が1.2~1.4m程度と長く、火床面から煙道部先端の底面にかけて急激に低くなり、最終的に著しく破壊されたものが散見されるようになる。カマドの中には、取り付け位置が北壁の左や右に寄ったものが現れ、2m以下の建物には、炉のみが付くものや、カマドが無いものもある。

一方、掘立柱建物跡には、1×1間、1×2間、2×2間のものがあり、大凡の規模としては梁間1.6~3.5m、桁行2.1~3.6m前後となる。南北軸は積穴住居跡の主軸方位と概ね一致する。建物内に土坑を内包する可能性があるものもあり、この土坑の年代観を持って本群に含めたものが2棟ある(3号・9号)。

住居の焼失・埋没 他の群とは異なり、明確な形で焼失した住居跡が確認されていない。平安時代の降下火山灰は、3棟を除く全てに十和田aや白頭山が堆積し、土坑2基にも十和田aが認められる。本群に属す可能性のある円形周溝1基(ふくべ(4)遺跡1号)にも十和田aか白頭山のいずれかが含まれていた。



1群

図21 1群の道構

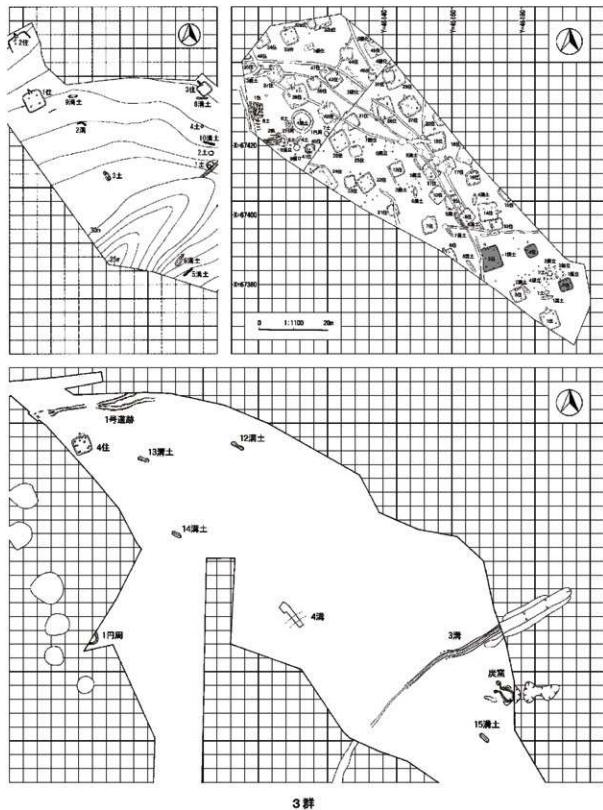
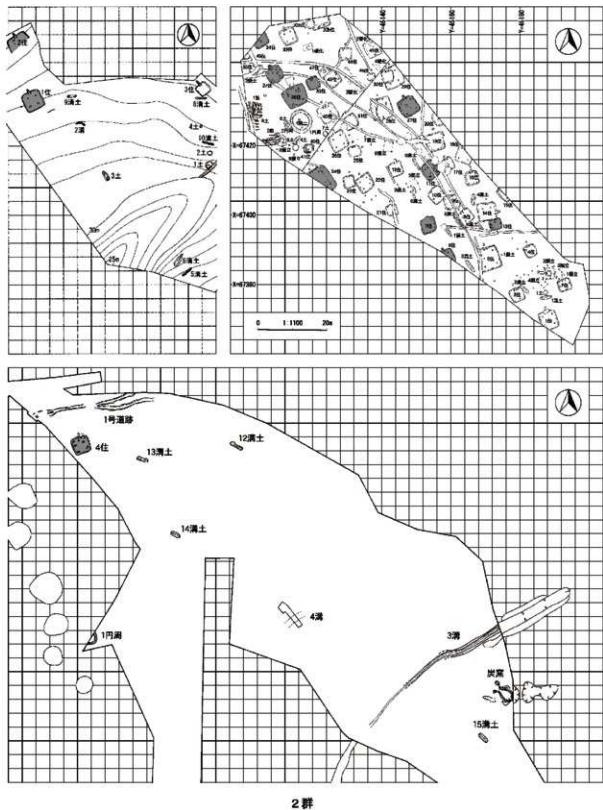
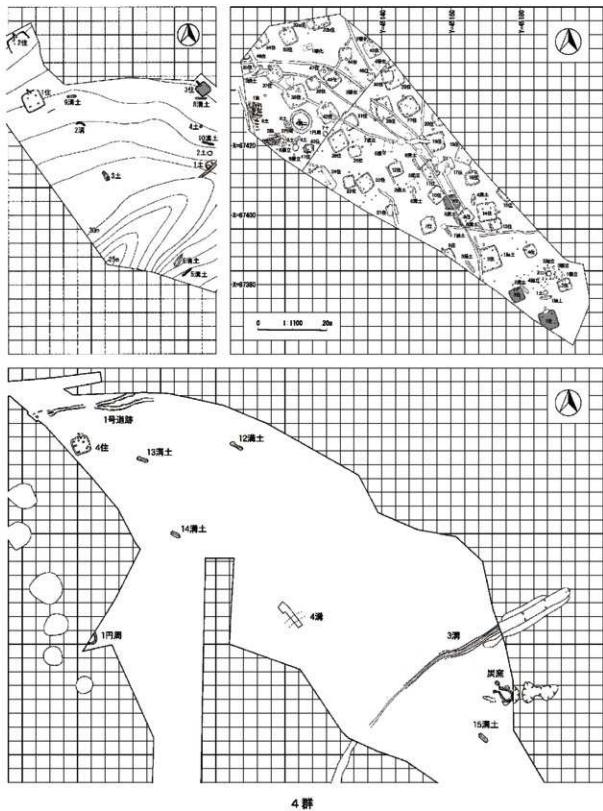
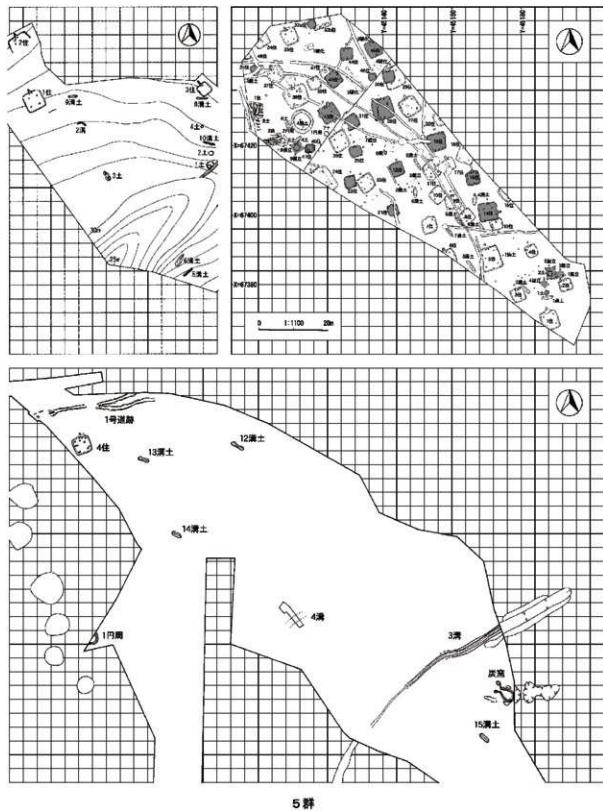


図22 2・3群の遺構



4群

図23 4・5群の遺構



5群

主な出土遺物 土師器壺・甕、須恵器皿・壺・壺・甕、土製支脚、土製紡錘車、軽石加工品、砥石、敲磨器、鐵鎌などがある。断片化した遺物が多く、遺構数の割に良好な資料は少ないが、42号住居跡などから他の遺跡には少ない出羽型（北陸型）長胴甕や高台の付された壺（高台壺）が一定量出土している。また、41号住居跡に須恵器が纏まっていたほか、43号住居跡からはいわゆる転用窓も発見された。この他、カマド覆土や土坑内よりイネ・イネ？・アワといった栽培植物が炭化種実となって検出されている。1群～4群まで存在した土製紡錘車は、44号住居跡の床面上から1点出土したもの、その形状は7～8世紀段階の特徴に類似しており、本段階に製作されたものか疑問が残る。よって、本段階の紡錘車は、ほぼ鉄製のものに置き換わっていたと推測しておきたい。

d. 平安時代以後～近代

古代の遺構が埋没し、平安期の火山灰が降下した後、本遺跡では中世～近現代の遺構・遺物が現れる。但し、その数は非常に少なく、時期を特定できないものも多い。よって、9世紀後半以後、考古学的に不鮮明な状況が長く続き、現代に至るまで大きな開発が無かった様子がうかがえる。そして、このことが古代までの歴史を良好に保つことに繋がったのであろう。以下、これまでの調査成果の要点を遺跡ごとにまとめておく。

ふくべ（3）遺跡

遺構：溝と畝状遺構がある。溝は調査区の広範囲にわたって築かれており、白頭山火山灰降下～第二次世界大戦以前の間に形成されている。この中には近代以後に地境として築かれた可能性の高いものがあり、これについては調査区外に凹地として延びているため視認可能である。溝同士の重複も多数みられるが、前後関係の判定が容易でないことに加え、調査の進行上、ほとんど検討していない。今後の課題である。他方、畝状遺構は同一地点における新旧があり、今述べた地境らしき溝よりも前に形成されている。しかし、Ⅱ層をほぼ除去した形で營まれていることから、近代以前の比較的新しい段階に形成されたものと判断される。

遺物：遺構外より、北宋錢の元祐通寶1（1089年初鋤）、新寛永通寶1（1697年初鋤）、寛永鐵錢2（1739年初鋤）が出土したほか、地境らしき溝の覆土からは、断面丸型の針金らしき鉄製品が発見された。

ふくべ（4）遺跡

遺構：溝（3・4号）と炭窯跡（1号）がある。調査区周辺の事情に詳しい人物の証言からすると、いずれも昭和20年以前の構築・廃絶と考えられる。4号溝跡は不明な点多いものの、煉瓦が出土した1号炭窯跡は近代、I～II層より掘り込まれている3号溝跡も歴史的には相当新しいだろう。これを裏付けるように、4号溝跡と1号炭窯跡は調査前から凹地として視認可能だった。ちなみに、こうした凹地は今も調査区外に残っている。

遺物：遺構外より、北宋錢の元豐通寶1（1074年初鋤）、元祐通寶1（1089年初鋤）、鏹銭らしき錢1、近代貨幣2、近世の陶磁器片1、近代の陶磁器片2が出土している。

e. 時期不明の遺構

帰属時期が判断しにくい遺構について、可能性などを交えながら遺跡ごとにまとめておく。

ふくべ(3) 遺跡

掘立柱建物跡 5・6・7号が該当。5号はIV～V層で確認された2号焼土遺構を伴う可能性がある。仮にそうなると、飛鳥～平安時代かそれ以前の可能性も高まるだろう。また、7号は重複関係にある溝跡よりも先に構築された遺構である。

Pit 発見・記録した多くが時期不明である。確認面は主にⅢ・Ⅳ・Ⅴ層だが、本来の構築面は定かではない。34号住居跡の内部に存在する事例のように、7世紀末～8世紀初頭の住居跡が相当埋没した後に設けられたものもあれば、5群以前と考えられる3号土坑より古い例も存在する。

焼土遺構 2・3・4号が該当する。飛鳥～平安時代の可能性もあり、詳細はそちらの焼土遺構の項目・説明を参照のこと。

ふくべ(4) 遺跡

溝跡 1・2号が該当。1号は沢への排水溝ないし近代以後の地境の可能性などが考えられ、2号は円形周溝の一部のようにもみえるが、いずれも詳細不明である。

土坑 1・2・3・4号が該当。いずれもⅥ層で確認。2号と4号は覆土中に中揮浮石を含んでおり、縄文時代前期前葉以後と考えられる。周辺の遺構配置や遺物出土状況からすると、縄文時代・弥生時代前期・飛鳥～平安時代のいずれかに属する可能性もあるが、具体的な時期は不明。

3. 理化学的分析

これまでに行った分析の種類と試料の年代などをまとめておく（表5）。詳細は適宜参照のこと。

報告書	分析名	主な試料
県392集	ふくべ(3)・(4) 遺跡の古環境と住居構築の用材等について	基盤土层II・Ⅲ層、24号住居跡堆積土、黒褐色製石器
	ふくべ(3) 遺跡出土の火山灰について	7～9世紀代の遺構堆積土
	放射性炭素年代測定	7～9世紀代の炭化材
	ふくべ(3)・(4) 遺跡の樹種同定について	7～9世紀代の炭化材
	ふくべ(3)・(4) 遺跡の出土分析	弥生時代前期および7～9世紀代の土器群・須恵器・土製品
	ふくべ(3) 遺跡出土鉄製品の保存処理・分析調査	7～9世紀代の鉄製品・環状錐製品
県457集	横状遺構採取土壌に関する理化学的分析	十和田a火山灰降下以後の横状遺構採取土壌
	炭酸カルシウムの理化学的分析	近代炭酸カルシウム・炭化材
	炭酸カルシウムの理化学的分析	7～9世紀代の炭化材
	ふくべ(3)・(4) 遺跡の樹種同定	7～9世紀代の炭化材
	ふくべ(3)・(4) 遺跡の樹種同定	7～9世紀代の炭化材
	ふくべ(3)・(4) 遺跡の土器・土壤の化学分析	7～9世紀代の土器群と遺構内の白色系粘土
	ふくべ(3)・(4) 遺跡出土須恵器の胎土分析	8～9世紀代の須恵器
	ふくべ(3)・(4) 遺跡出土ガラス土成分分析	7世紀末～8世紀初頭の住居跡出土の管切り土

表5 ふくべ(3)・(4) 遺跡で行った理化学的分析

4. ふくべ遺跡群周辺の凹地と塚について

本遺跡周辺には、以前から古代の竪穴住居とみられる凹地があることが知られ、それが遺跡発見の契機にもなっていたが、凹地の数や分布状況の詳細は不明とされていた（青森県教育委員会1988）。

ところが、今回の調査にあたり、こうした凹地が調査区周辺および遺跡として認識されている範囲外にも多数存在している事実がわかり、開発や文化財保護の観点からも正確な記録を残す必要性が生じてきた。これは、最近、国指定の史跡となった阿光坊古墳群との関わりを考える上でも、良い効果を発揮することが期待される。以下、付図に基づきながら、踏査・測量の内容と結果をまとめることとする。

踏査・測量範囲 おいらせ町字阿光坊から字瓢の東西約1.4kmの間。明神川と奥入瀬川に挟まれた台地の南側を中心に行った。北側はY=44,000～45,000の周辺のみ踏査したが、今回の踏査では目立つ成果が得られなかった。

円形の凹地 埋まり切っていない古代の竪穴住居跡の可能性が高い。約60ヶ所を測量したほか、ふくべ（3）遺跡地内に7基発見した。図示していないが、字瓢に所在する洗平（1）遺跡地内にも5基前後存在する。大きくみれば台地南側の縁辺部が多く、やや台地の中程に入り込んでいる場合は、大抵、沢が近くに存在する。要するに、奥入瀬川を望む台地の縁辺や沢を取り囲む尾根上に凹地が存在していることになる。なお、2,500分の1の地形図に表れていない沢もあるので、踏査の際は注意が要る。

塚状の盛土 1ヶ所確認・測量した。通称、瓢塚あるいは大塔坊塚という。冒頭で述べたように、かつて2基あったとされるうちの1基であろう。字瓢、そして、ふくべ遺跡群の名称の礎となった重要な塚である。

炭窯跡 1ヶ所確認・測量した。隣接するふくべ（4）遺跡の調査区内から発見された炭窯も、調査前、この凹地と同じ様な形を残していた。

溝跡・盛土 ふくべ（4）遺跡の調査で発見された3号溝跡とそれに付随する盛土が調査区外に延びており、これを測量した。

その他 ふくべ（4）遺跡の調査区周辺において、地境らしき溝や防空壕といわれるL字型の大型の溝を幾つか測量しているが、今回の付図には反映していない。

5. あとがき

2003年から2006年にかけて青森県教育委員会と旧下田町教育委員会が相次いで発掘調査が行った結果、今は山林と化したこの地に、かつて飛鳥～平安時代の大規模集落が存在していたことが明らかになってきた。

この間、下田町は百石町との合併により「おいらせ町」となり、2007年に阿光坊古墳群が国の史跡となった。今後、更に活気づいていく町の発展の上でも、ふくべ遺跡群や阿光坊古墳群の存在は、より一層重視されていくことであろう。

こうした意味も含め、今回の分析では、これまでの調査で得られた諸相を具体的に纏めるよう心掛

けた。同時に、前回の分析で詳述できなかった点や訂正すべき点に加え、これまで不明とされてきた古代の住居跡らしき凹地の内容も報告した。前回同様、至らない点は多々あるだろう。しかし、これから先、更に内容が改訂され、より良い方向に進んでいくことを望んでいる。

ところで、本遺跡群の主体となる飛鳥・奈良・平安の資料は、やはり阿光坊古墳群と消長を共にする傾向にある。これは、周辺の古代遺跡や下田の歴史的傾向でもあるが、今のところ本遺跡のみの特徴として重要なのが、ガラス玉・環状錫製品・鉄製轡など、古墳群の副葬品と同様のものが得られた事実である。古墳に近接する集落として、ふくべ・立蛇・中野平遺跡の存在意義は特に大きく、古墳群形成に深く関わっていたと考えざるを得ない。但し、墓域と集落という形で単純に割り切れるかどうか必ずしも定かではなく、今回報告した円形周溝や瓢塚（大塔坊塚）のように、墳墓群と同じ性格や機能を持っていたか否かは別にせよ、集落周辺にも墳墓らしきもののが存在していたことは確かである。

将来、これら古墳群と周辺集落の動向は、徐々に解明されていくものと思われるが、ここで少々触れておくと、目下、ふくべ1群段階（7世紀後半頃）の資料は、他の遺跡にあまり多くはない。類似するものは、中野平・向山（4）などの遺跡で幾つか発見されている程度である。よって、ふくべ2群段階（7世紀末～8世紀初頭頃）になると、中野平遺跡でも数が増え、奥入瀬川下流域一帯で散見されるようになる。そして、ふくべ3群～4群段階（8世紀後半～9世紀前半頃）には、全般的に減少傾向を示す。中野平遺跡では一定量存在しているものの、ふくべ（3）・（4）遺跡では激減といったところである。そして、最後のふくべ5群段階（8世紀後半～9世紀前半頃）に至り、これらの遺跡で再び資料が急増する。ある意味、ふくべ2群段階に近い増加率であろう。この中には、他地域産の須恵器や土師器など、異系ともいべき遺物も散見されるが、とりわけ、ふくべ・中野平の両遺跡に集中する出羽型長胴甕、ふくべ（3）遺跡に非常に特徴的な高台壙、これらの規格・製作技法は非常に統一されていたことが明らかとなった。恐らく、奥入瀬川下流域左岸を中心とした一極集中型ともいべき生産・流通形態だったと予測される。

ただ、以上の流れも、10世紀前半頃に大きく途絶えた模様である。なぜなら、阿光坊古墳群と周辺の集落群には、十和田a火山灰や白頭山火山灰の降下前に廃絶している遺構が圧倒的に多いからである。その一例として、ふくべ5群の住居跡の場合、床面上に黒色土が数十cm形成された後、十和田a火山灰が層状に堆積していた。こうして、10世紀後半以降、急激に不鮮明に化した状況は、近世に至るまで長く続くこととなる。

それにしても、何故、このような歴史的空白が生まれたのであろうか。

確かに、旧下田町内における10世紀後半頃の資料としては、下谷地（1）遺跡のものが挙げられる程度だが、周辺の六戸町や三沢市などでは、環濠集落や防護性集落などと呼ばれる遺跡が調査、もしくは地表面上に確認されている。これに加え、この時期の資料は、7～10世紀前半の資料が希薄、ないし継続性の弱い坪川以北・七戸周辺・奥入瀬川中流域で増加している。つまり、10世紀前半頃、奥入瀬川流域では古墳群や集落が激減するのに対し、上記の周辺地域では集落が存在、あるいは増加しているのである（佐藤2004）。

この背後に何があったのかは今後の課題であるが、いずれにせよ、阿光坊古墳群と周辺集落の起源に深く関わる7世紀後半以前の様相に加え、これらの衰退が見込まれる10世紀前半以後の様相追及に

より、阿光坊古墳群とその周辺によって築かれた歴史が一層鮮明になっていくことだろう。

以上、ふくべ遺跡群周辺には、7~10世紀初頭頃の遺跡が多数存在していることが明らかとなった訳だが、これほどまでの墳墓と集落の中は青森県内では稀であり、他では八戸市南部、つまり鹿島沢・丹後平・殿見で発見されている墳墓と周辺集落群が該当する程度である。しかしながら、これら北日本有数の集団がいかなる存在だったかについては良く解っていない。

ただ、この時期の文献史料である『日本後記』弘仁二年(811)七月辛酉(29日)条には、「都母村」という存在が記されており、それが青森県南地方の太平洋側と推測される場所にあったという意見は古くから提出されている。

ところが、中央の記録に残るほどの勢力だったと推測されるこの集団が、主に文献史料側から上北郡天間林村坪(現:七戸町)などに比定されて久しいものの、未だ具体的な回答は得られていないよう思われる。

そこで、考古学側から遺跡の分布密度に着目して検討を加えると、青森県内において先の記事に前後する時期に遺跡が集中する地域は、目下、先の奥入瀬川下流域左岸一帯と八戸南部しか見当たらぬことが解る。ちなみに、津軽地方を含む他の地域では、この時期の遺跡が極端に少なく、大規模な墳墓群の形成も知られていない。

このように、仮に都母村が上北地方にあったとすれば、それは奥入瀬川下流域左岸一帯の可能性が最も高いとする見解は既に幾つか出されているが(小谷地2005、佐藤2004・2005)、これから先、こうした議論を一層高めていくには、墳墓や集落などが集中する様子を如何に纏め、そして如何に表現していくかも鍵となってくる。

幸いにも、奥入瀬川下流域一帯は墳墓や集落が盛土や凹地として良く残る条件にあり、八戸南部では開発と引き換えに遺跡の調査が盛んに行われてきた。重要なのは、「都母村か否か」ということにこだわるよりも、むしろ上記の成果が客観的に整理され、そして表現されていくことこそある。少なくとも考古学的に都母村云々を議論する場合、あくまでもこうした作業の延長線上で行うべきだろう。

6. ふくべ遺跡に関する基礎的文献

- 青森県教育委員会 1988 「下谷地(1)周辺の古代の遺跡」「下谷地(1)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第109集
 青森県教育委員会 2001 「青森県遺跡詳細分布調査報告書 XIII」 青森県埋蔵文化財調査報告書第310集
 青森県教育委員会 2005 「通日本遺跡・ふくべ(3)遺跡・ふくべ(4)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
 下田町教育委員会 1979 「下田町誌」
 下田町教育委員会 2005 「下田町内遺跡発掘調査報告書」8 下田町埋蔵文化財調査報告書第21集
 下田町教育委員会 2006 「下田町内遺跡発掘調査報告書」9 下田町埋蔵文化財調査報告書第22集
 鈴木 克彦 1978 「青森県弥生土器集成Ⅱ」「考古風土記」4
 成田 健康 1987 「阿光坊の史跡と伝説」 私刊

*論文等で触れられている程度のものを除く。

(佐藤 智生)

註 署

- 1 「近年土地造成のため、周辺が大きく削り去られて塚があるところだけが残され、遠からず崩れ去る運命におかれている」(P.11) とある。
- 2 おいらせ町教育委員会の小谷地塚氏の御教示による。前回の報告では、周辺住民の聞き取りに基づいて消滅したと記載したが、破壊を免れていたことが判明したため、ここに訂正したい。なお、聞き取りの際に感じたこととして、近隣集落の住民ですら、瓢箪や大塔坊塚の名を知る人は少なくなってきたているようと思われる。
- 3 二枚構式の台付鉢片に加え、下田町立蛇(2) 遺跡や三沢市小山田(2) 遺跡出土資料にみる地紋と平行沈線主体の資料。
- 4 7世紀後半の資料には蔓などが巻かれたまま被熱した器(33件)があり、7世紀末~8世紀初頭のものには口縁部が装飾的な蔓(34件)、胎土に黒雲母を含む蔓(遺構外)、ガラス製管切玉(34件)が挙げられる。なお、2群前後に属する疑いのあるものとして、45件出土の異形土製品もしくは土器がある。9世紀後半では、丸底の出羽型長胴甕も一定量出土した。
- 5 前回報告分に関しては、0.32~0.48(0.45前後に集中)である。
- 6 ふくべ(3) 遺跡32b号住居跡出土資料は、炭化材上層に人为的に投げ入れられたものが主体である。概ね本段階に属するが、内面にミガキを有す蔓が散見されるなど、前段階のものが混在している恐れもあるため、参考資料とした。また、ふくべ(4) 遺跡1号道路状遺構の資料は、特定の地点の底面付近からまとめて出土しているが、各個体の残存率がやや低く、住居跡のカマド内や炭化材下層などから発見された資料よりも確実性が劣るため、同じく参考資料とした。
- 7 明確な資料を欠くものの、十和田a火山灰の堆積状況や出土土器の特徴からすると、ふくべ(3) 遺跡32a号住居跡もこの段階の可能性がある。
- 8 筆者が前任者から作業を引き継いだ時点では既に瓢箪一括資料として取り上げられており、出土地点や出土状況に関する詳細な記録も残っていないため、これ以上のことは説明できない。
- 9 向田(35) 遺跡のものは、径1.8cm、重さ8.5g、紅白2種類のガラスから成る丸玉である。10世紀後半~11世紀初頭頃の111号住居跡より出土。福井流星氏は、製作を巻き付け技法、製作年代は9~10世紀代と推定している。なお、筆者も調査・報告に参加しており、資料を実見している。他方、岩ノ沢平遺跡の例は、十和田a白頭山火山灰降下の間とされる第5号竪穴住居跡の床面から外径0.6cm、厚さ0.4cmの小玉が出土している(八戸市教育委員会1992)。
- 10 阿光坊古墳群のうち、7世紀中葉~8世紀前半とされるA3・A6・T2・T3・T4号墳により計404個出土している(おいらせ町教育委員会2007)。報告書を見る限り、本遺跡出土品に近いものは、T2・T3号墳の一部に認められる。
- 11 以前の報告においても、27号住居跡床面出土の環状錫製品と鉄製馬具(櫛)を用いて阿光坊古墳群との関連性を指摘した。なお、これら2点も、本ガラス玉と同時期であることに注意したい。
- 12 念のため、確認されなかった残り9棟の内訳を記しておくと、調査区外に存在する可能性のあるものが6棟、カマドらしきものが全く見当たらないものが2棟、カマドというよりはむしろがに近いものが1棟となる。
- 13 前回の報告でN-3°・W-N-51°・Wと記載している箇所もあるが、誤りだったため訂正する。
- 14 43号住居跡のカマドは、規格性のある5群のカマドの中において、唯一、設置位置が他とは異なる。加えて、本集落では、原則的に重複を避けて住居を構築しているにも関わらず、43号住居跡ではこれが守られていない。以上から推測すると、43号を建てた人々は、元々浅い上に人为堆積があり、しかも200年近く前に設けられた47号の存在に気付かず住居を構築してしまったと考えられる。そして、機能性の問題か、精神性の問題か、それとも他の理由なのかは不明にせよ、ともかく古い住居跡の方角を避け、敢て同時に住居とは異なる方向にカマドを設けたのではないかろうか。結果的に43号の主軸方向がN-50°・Eを示すこととなったのは、当初、そこから90°北にあたるN-40°・Wを意識していたためと思われる。但し、この推測も、5群の主軸方向が真北に近くなっていく傾向からやや外れており、確かとはいえない。
- 15 この他、肉眼的には、採取場所が限定される最終開水期の白色系粘土層も考えられる。しかし、蛍光X線分析による土中のMn濃度の測定結果からは、この層よりも上位の層、具体的には十和田・八甲田火山灰の影響が大きい表層近くの層とされて

いる。すなわち、八戸火山灰Ⅰ～Ⅲ層の可能性が高いことを示す見解だが、今後、岩石学的な観点などからも検証していく必要があろう。

- 16 45住もの段階とみられるが、造構が調査区間にあり、本来の形状を示していないため除外。煙道部の形状からすると46住もの段階とみられるが、遺物による確証が得られないため、やはり除外する。
- 17 13号住居跡は、重複による破壊のため、煙道部構造が全く解らない。よって、あくまでも参考資料である。しかしながら、住居の掘り込みの浅さに加え、後述する床面中央の被熱範囲の在り方などを考えると、半地下式か無煙道式の煙道部だったと考えられる。
- 18 ここでいう信頼性が劣る資料とは、支脚が1点しか確認されなかったものの、更にもう1点あったと考えられる例である。より具体的には、カマドの袖や火床面との位置関係からすると、支脚の出土位置が左右どちらかに偏っているものを指す。この中には、カマド周辺などから、支脚への利用が考えられる土製支脚や軽石加工品などが出土している場合もある（ふくべ（3）遺跡25・33住）。なお、ふくべ（3）遺跡13住に関しては、火床面上に支脚の設置痕らしき小穴が1ヶ所存在していると報告したものの、重複による破壊が著しい上に木根等の可能性も否定できないため、ここでは除外している。
- 19 参考までに、冒頭で信頼性が劣るとした5例のうち、4例は本群に属す。いずれも2つ掛けが疑われるものだが、全て4m台の住居跡であり、このうち3例に主柱穴を認める。
- 20 信頼性が劣るとした、ふくべ（4）遺跡2住（6.3m）も2つ掛けが疑われる。
- 21 信頼性が劣る25住（3.2m）は、小型土器と土製支脚の2つ掛けとなる可能性がある。
- 22 27号住居跡のものは、前回の報告で深さ33cmとなっているが、77cmの誤りだったため訂正する。
- 23 こうした土坑は、近隣の小田内沼遺跡（県107集）・中野平遺跡（県134集）・向山（4）遺跡（県134集）においても注目されており、本遺跡とほぼ類似する特徴が挙げられている。このうち、中野平遺跡では「床面構築直前に掘りこめられ、床面構築時に一気に埋められている（P. 130）」との見解が、向山（4）遺跡でも「使用時には埋められていたわけで、その機能を貯蔵穴等の住居使用時ないしはそれ以降に求めるのは困難（P. 130）」とし、住居構築における必要性（宗教的行為など）が想定されている。これに対し、本遺跡では床面上で埋め戻しが確認できたケースが複数あり（4・16・17・20・27住）、必ずしも上記の見解に当てはまらないことを記しておく。いずれにしても、住居廃絶時、これらの土坑が人為的に埋められていたことに変わりはない。
- 24 5住・14住では、少量ながら炭化材が床面上から検出されており、部分的な焼失による被熱が疑われる。
- 25 発見される炭化材は、硬質なもののが少なく、取り上げ段階で形が崩れやすい。よって、図面に表れているほど残存状況は良いとはいえない、分析に適した資料は意外と少ないのが実状である。
- 26 32b号住居跡は、1群か2群のどちらかに属す。ここでは炭化材層の上部に2群の遺物が人為的に投入されていることから、便宜的に2群以前、つまり1群に含めている。
- 27 ふくべ（3）遺跡2号は十和田a、ふくべ（4）遺跡1号は十和田aないし白頭山火山灰降下以前である。この点は確かだが、ふくべ（3）遺跡1号は、後述するように2号との関連性から十和田a火山灰降下以前の可能性が高いと判断している。
- 28 青森県内にみられる墳墓群の円形周溝において、主体部が確認されず、副葬品や供品が少なくなるのは9世紀以降の特徴である。但し、本遺跡のような集落遺跡に墳墓群の特徴がそのまま当てはまるか否か定かではない。
- 29 24住出土。鍛造・焼入れのなされた製品であり、木柄はクリ近似種であった。
- 30 27住出土。4.4%の鉛を含む純度95.6%の錫から成ることが判明している。
- 31 これら3棟はカマド煙道部の断面形状も5群に近い。加えて、ふくべ（3）遺跡の3号と9号住居跡は、土師器壺の器形に加え、土師器壺にロクロ成形が多用されるなど、5群的な要素を備えている。他方、ふくべ（4）遺跡3住に関しては、土師器と須恵器の特徴から9世紀前半頃と推測しているが、焼失住居という点に着目すると、3群的ともいえる。

引用・参考文献

(個人)

- 宇部 則保 1989 「青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として—」『北海道考古学』25
- 小谷地 肇 2005 「奥入瀬川流域左岸の遺跡群と古代の都母村」「古代蝦夷の実像を探る」 青森県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤 智生 2004 「平安時代における青森県上北郡の様相について」「向田(35)遺跡」(第2分冊) 青森県埋蔵文化財調査報告書第373集
- 佐藤 智生 2005 「遺跡周辺の古代遺跡と発掘調査」「通目木遺跡・ふくべ(3)遺跡・ふくべ(4)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
- 鈴木 克彦 1978 「青森県弥生土器集成Ⅱ」「考古風土記」4
- 成田 健康 1987 「阿光坊の史跡と伝説」 私刊
- 福田 友之 2007 「小石(ピッ)の音」「青森県考古学」15 青森県考古学会
- 藤原弘明・佐藤智生・葛川貴祥 2007 「須恵器の生産と消費(青森県)」「北方社会史の視座」 歴史・文化・生活1 清文堂
- 横須賀倫達 2001 「古墳時代ガラス小玉の製作技法」「日本考古学の基礎研究」茨城大学人文学部考古学研究室

(機関)

- 青森県教育委員会 1988 「下谷地(1)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第109集
- 青森県教育委員会 1991 「中野平遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
- 青森県教育委員会 1991 「山山(4)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第134集
- 青森県教育委員会 2001 「黒坂遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第306集
- 青森県教育委員会 2001 「青森県遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ」 青森県埋蔵文化財調査報告書第310集
- 青森県教育委員会 2004 「笛ノ沢(3)遺跡」(第一分冊) 青森県埋蔵文化財調査報告書第372集
- 青森県教育委員会 2004 「向田(35)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第373集
- 青森県教育委員会 2005 「通目木遺跡・ふくべ(3)遺跡・ふくべ(4)遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
- 安中市教育委員会 2007 「清水II遺跡・清水V遺跡・清水VI遺跡」
- おいらせ町教育委員会 2007 「阿光坊古墳群発掘調査報告書」 おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集
- おいらせ町教育委員会 2008 「中野平遺跡発掘調査報告書」Ⅳ おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 財團法人 かながわ考古学財團 2003 「下寺尾西方△遺跡」 かながわ考古学財團調査報告157
- 財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 「埴跡・砂田前」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第102集
- 下田町教育委員会 1979 「下田町誌」
- 下田町教育委員会 1998 「山山(6)遺跡」 下田町埋蔵文化財調査報告書第11集
- 下田町教育委員会 2002 「山山(4)遺跡」 下田町埋蔵文化財調査報告書第17集
- 下田町教育委員会 2005 「下田町内遺跡発掘調査報告書」8 下田町埋蔵文化財調査報告書第21集
- 下田町教育委員会 2006 「下田町内遺跡発掘調査報告書」9 下田町埋蔵文化財調査報告書第22集
- 八戸市教育委員会 1992 「岩ノ沢平遺跡」 八戸市埋蔵文化財調査報告書第46集

写 真 図 版

ふくべ(3)遺跡

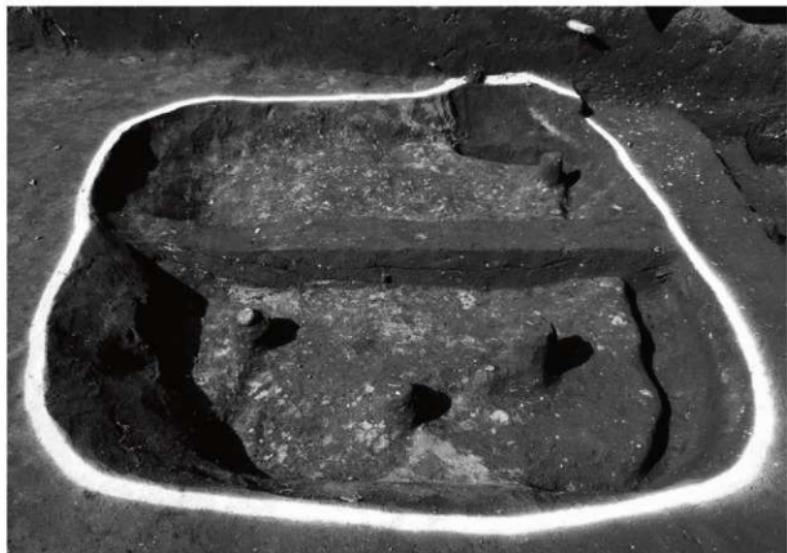


作業風景（北西→）



遺構・調査関係者

写真 1 作業風景・調査関係者



第32a号住居跡土層断面（南→）



第32b号住居跡完掘（南→）

写真2 第32a号住居跡・第32b号住居跡①

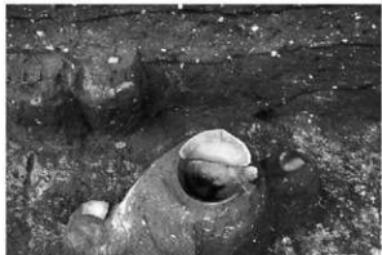


炭化材出土状況（南→）



遺物出土状況（南→）

写真3 第32b号住居跡②



前頁A地点出土土器（図14-3）①（南→）



前頁A地点出土土器（図14-3）②（南→）



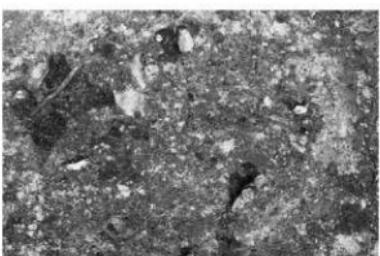
前頁B地点出土土器（図15-12）（南→）



土器（図14-6）出土状況（南→）



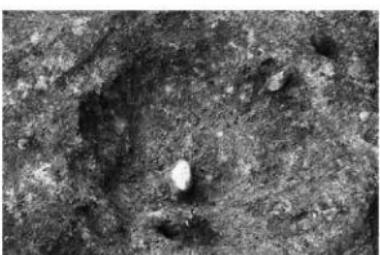
土器（図15-7）出土状況（南→）



3号土坑確認状況（南→）



1号土坑土層断面（南→）



同左完掘（南→）

写真4 第32b号住居跡③



完掘（南東→）



カマド完掘①（南東→）



カマド完掘②（南東→）



カマド付近土層断面A-A'（西→）

写真5 第33号住居跡①



土層断面・炭化材出土状況（南→）



炭化材出土状況（南東→）

写真6 第33号住居跡②



カマド検出状況（南東→）



A地点出土紡錘車（図20-7）（南東→）



C地点出土土器（図19-2）（南東→）



B地点出土土器（図19-3）（南東→）



前頁A地点出土破壊窯（図33-9）（南東→）

写真7 第33号住居跡③

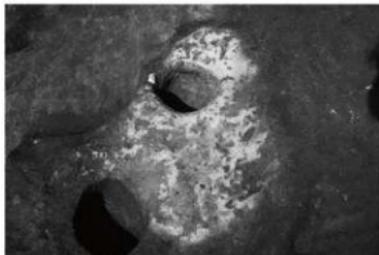


完掘 (南東→)

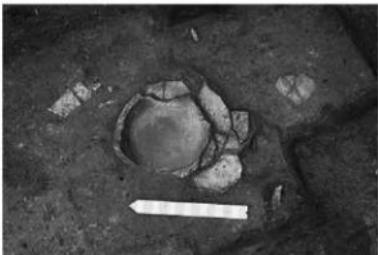


土層断面 (南東→)

写真8 第34号住居跡①



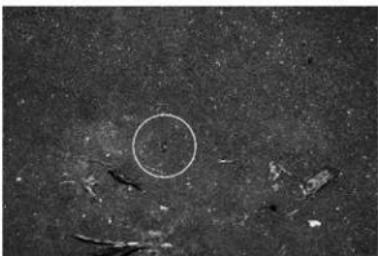
第34号住居跡火床面確認状況（南東→）



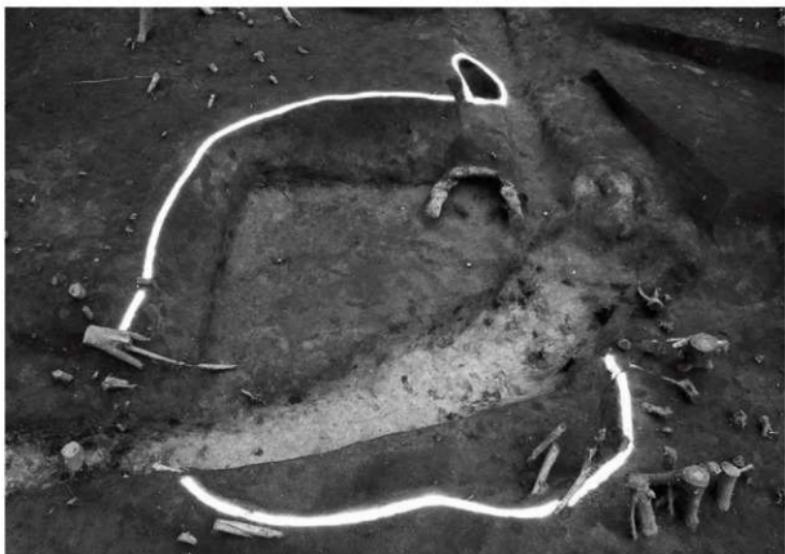
第34号住居跡土器（図23-1）出土状況（南東→）



第34号住居跡遺物（図24-7）出土状況②（南東→）

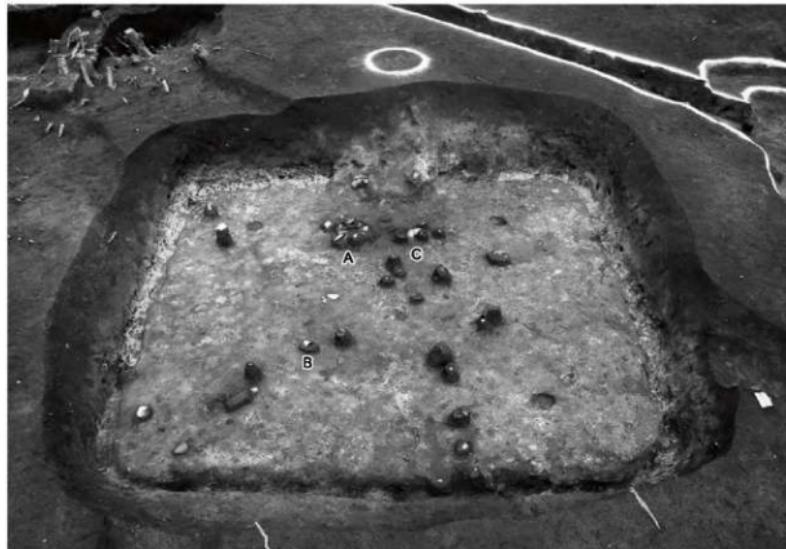


第34号住居跡ガラス製管切玉（図24-8）出土状況（南東→）



第35号住居跡完掘（南→）

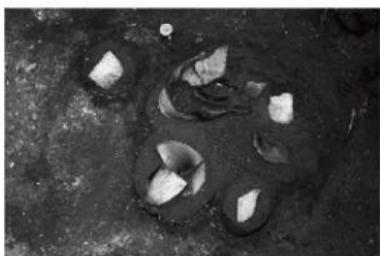
写真9 第34号住居跡②・第35号住居跡



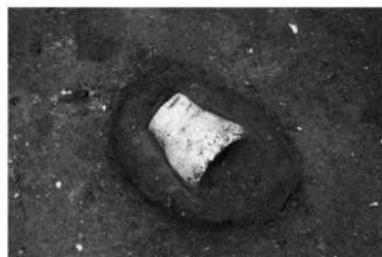
遺物出土状況（南東→）



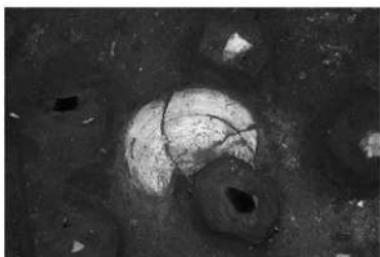
カマド検出状況（南東→）



A地点出土土器（図28-2・30-15）（南東→）



B地点出土土器（図37-10）（南東→）

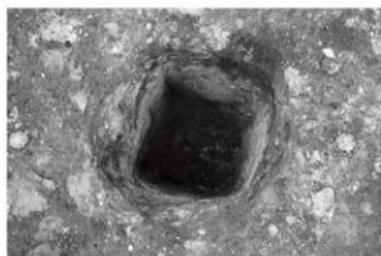


C地点出土土器（図28-5）（南東→）

写真10 第37号住居跡①



完掘（南東→）



Pit 1（南東→）



Pit 2（南東→）

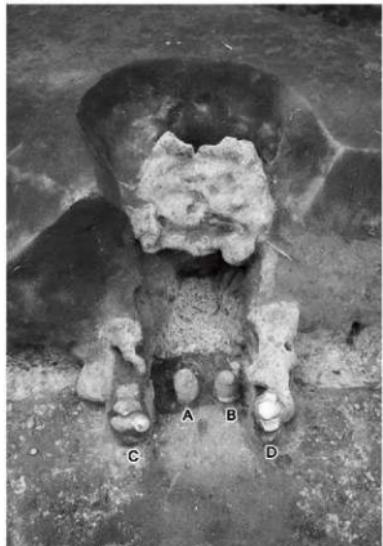


Pit 3（南東→）



Pit 2 土層断面（南東→）

写真11 第37号住居跡②



カマド完掘①（南東→）



カマド完掘②（北東→）



カマド完掘③（東→）



A地点出土土器（図29-12）（南東→）



B地点出土土器（図29-11）（南東→）

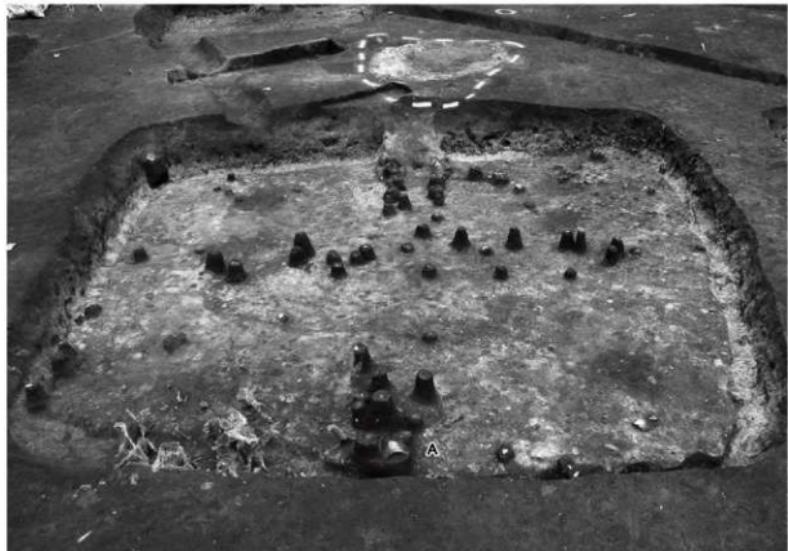


C地点出土土器（図29-14）（南東→）



D地点出土土器（図29-13）（南東→）

写真12 第37号住居跡③



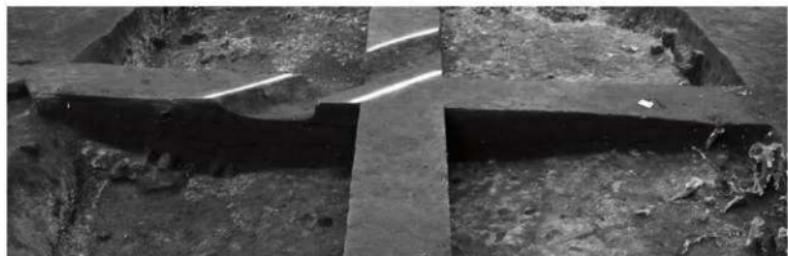
遺物出土状況（南東→）



A地点出土土器（図34-5）（南東→）



覆土出土瓶（図34-2）（南東→）



土層断面A-A'（南西→）

写真13 第38号住居跡①



カマド完掘①（南東→）



カマド完掘②（東→）



カマド完掘③（南東→）



A地点出土土器（図34-3）（南東→）



B地点出土土器（図34-4）（南東→）

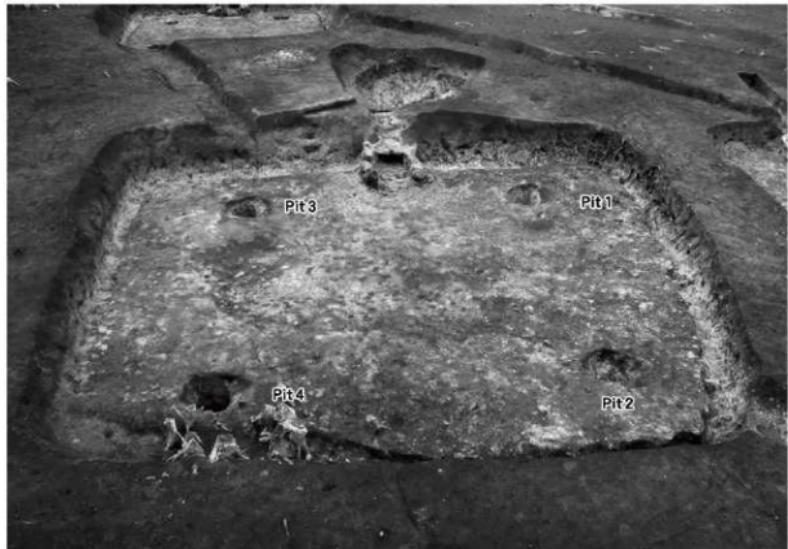


C地点出土土器（図35-8）（南東→）

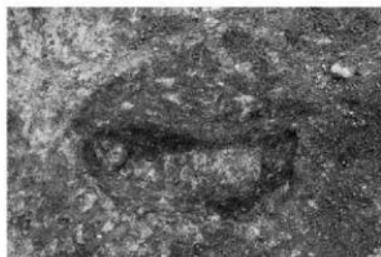


D地点出土土器（図35-7）（南東→）

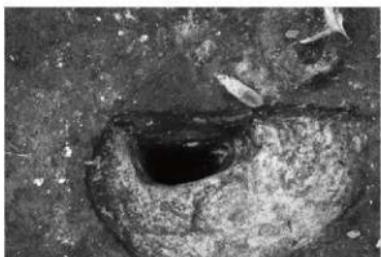
写真14 第38号住居跡②



完掘（南東→）



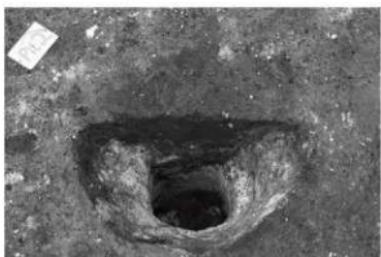
1号土坑土層断面（南東→）



Pit 1 土層断面（南東→）



Pit 4 土層断面（南東→）



Pit 2 土層断面（南東→）

写真15 第38号住居跡③



完掘（南東→）



カマド完掘①（南東→）



カマド完掘②（東→）



カマド完掘③（南東→）



火床面・1号土坑（C-C'）（東→）

写真16 第39号住居跡